

スパルタンレーサー 陣在ほのか 選手

×

ジーエス・ユアサ バッテリー

【後編】環境問題について

当社の代表取締役を務める湯淺栄人が、スパルタンレーサーの日本チャンピオンである陣在ほのか選手と対談を行いました。

前編では、陣在選手が参戦するスパルタンレースという競技の内容や、陣在選手の練習方法について。後編では、競技をやっていて気付く環境に関する問題や、当社が目指す環境に配慮した将来像などについて。

未来へ向けた発展のために、様々なトピックスをそれぞれの立場で意見を交換しました。



陣在ほのか じんざい

中学校の頃から陸上競技に打ち込み、大学卒業のタイミングでスパルタンレースに転向。

2021年、スパルタンレーサーになって約1年半ながら国内レースで優勝するなど、頭角を現す。

同競技でアジアトップになり、世界で活躍することを目標に活動を続ける伸び代たっぷりの23歳。



陣在ほのか選手(左)とGYB湯浅栄人社長(右)

湯浅社長 今、環境問題が大きくクローズアップされていて、我々の会社も環境に関わる業種であると思っています。

地球の温暖化や公害問題、森林破壊、カーボンニュートラルの問題、マイクロプラスチックの汚染など、様々な環境問題があります。陣在選手が日頃、関心を持っている環境問題はなにかありますか？

陣在選手 外で練習をする競技なので、地球温暖化の影響を一番に感じます。

今年の夏は本当に暑かった。夏場、昼間に外で練習するのは危険なレベルでした。このペースで毎年気温が上がっていくようであれば、練習の方法や環境を考えていかなきゃいけないなって思っています。

湯浅社長 地球温暖化については、いろいろな学者が研究している中で、10万年単位で見たら小さな上下変動だという人もいますが、人間が生活する上で発生させる物質によってその変化が大きくなっているという面は見逃せないと思います。



環境問題について語る湯浅社長

そういう意味では、火力発電や原子力発電からクリーンエネルギーの方にシフトしていく流れを作っていけるように取り組んでいます。

ジーエス・ユアサバッテリーは自動車やオートバイのエンジン始動用のバッテリーを販売している会社でして、親会社であるGSユアサがバッテリーを製造し、我々がその製品をマーケットに向けて販売しています。だから、車社会にかなり入っている会社なんですね。

これから車はどんどんエコカーにシフトしていく時代になっていきます。現在でもハイブリットカーが市場で大きな割合を占めています。今後は電気自動車になっていくのは間違いありません。その電気自動車に搭載されている動力用のリチウム電池もGSユアサグループは供給しています。

なので、我々の会社は環境型の企業であるということが言えますし、地球を守っていくことに貢献していかなければならないと思っています。

ゆあさ
湯浅 栄人
しげと



株式会社ジーエス・ユアサバッテリーの代表取締役。

慶応義塾大学を卒業後、湯浅電池株式会 現株GSユアサ)に入社。インドネシアのグループ会社(PT.YUASA BATTERY INDONESIA)社長や同社の執行役員に就任。

現在は 当社の代表取締役を務める。

湯淺社長 ところで、スパルタ
ンレース全体で環境問題に取り
組んでいることはあるものでし
うか？



SPARTAN RACE OKINAWA
重りを運ぶ陣在選手

陣在選手 逆に変えていかな
ければいけないと思っ
ていること
とがあります。今、レース中
のドリンク提供が全部ペ
ットボトルなんです。だから、
レース後には大量のプラスチ
ックゴミが出てしまっ
つ。

大会側からはコース上に捨
てないように言われている
のですが、それでも捨てる
人がいます。そういうところ
は変えていけるところなん
じゃないかと思っ
ています。

湯淺社長 運営サイドの意識
が変わらないといけない
ですね。こういった問題は
主催者や自治体、国が動
かないと大きく改善し
ないという点もあります。

陣在選手 御社はさまざま
な取り組みを行っていま
すが、その先にある理想
の社会とはどんなもの
だと考えているのでし
ょうか？

湯淺社長 人間の生活は自然
と一体であるべきだと考
えています。なので、自然
破壊を避けるためにCO2
を排出しないというこ
とが前提。ゼロカーボン
というのは、国として取
り組んでいかなければ
ならないですが、企業
が社会的責任を負って
いかなければならない
とも思います。日本では
人口が減っていますが、
世界では人口は増加し
ていて、100億人を
超える日もそう遠
くない。

そう考えるとフードロス
も避けなければなら
ないですし、水の確保
も大きな問題になっ
てくる。

水の確保にしても、環
境破壊や気候変更によ
って適切な水の循環
に変化が起きて、あ
る所では干ばつにな
り、別の所では洪水
になるわけです。

そういう問題が起
こらないように企業
としても取り組んで

なければいけない。

居住環境にしても、自然
と触れ合う機会が増
えていけばいいな
と思っ
ています。自然との
共存、自然に生か
されているという
感覚は大事です
よね。それが身
近な所で感じら
れる環境にな
って欲しい。

陣在選手 やっぱり、みんな
もっと山に行
った方がいい
ですね(笑)ただ、山
にもゴミが落
ちています。



高尾山でのトレイルラン

私は練習中
でもレース中
でも足が
ついても
ゴミを拾
うよう
にはして
いるので
すが、レ
ースの時
は塩分を
摂取する
ための
タブレット
のパッケ
ージゴミ
が多い。

故意に落
としてい
なくても
、ゴミは
出ちゃう
んですね。

湯淺社長 ポケット
から何か
を取り出
す時に落
としちゃ
ったりす
るのでし
ょうね。

陣在選手 新型コロナ
が流行し
てから登山ブ
ームにな
って、私
がよくトレ
ーニング
をする高
尾山も登
山者がす
ごく多
くなりました
。そうい
う部分
でも山に
ゴミが
多くな
っている
のかな
と感
じていま
す。

そうい
えば、御
社は小
学生を
対象に
したCO
2削減
コンク
ールを
毎年開
催して
いま
すよね
。その
意図は
どんな
もので
し
ょうか？



2009年より毎年「GSユアサ 小学生 ECO絵画コンクール」を開催

湯淺社長 我々の
絵画コン
クールは
環境を
テーマ
にして
いま
す。そ
その中
で賞を
設定し
ていて
、ト
ップの
賞が屋
久島へ
の招待

す。屋久島は縄文杉があるなど、自然が豊かなところ。ただし、受賞した子どもだけではなく、このPPOの絵画コンクールを通じて自然との触れ合いを増やしてもらいたい、環境に対して意識をしてもらいたいという思いがあります。

陣在選手 環境問題について学校の授業でも勉強していますが、次世代への教育は重要ですよ。

湯浅社長 環境型の会社ということもあって、次世代の育成にも取り組んでいきたいと考えています。まず、問題を認知してもらうことからだと思うんですよ。我々が行なっていること

は点の活動かもしれないですが、一人が環境の問題に対して意識をし始めると、その周りもなんとなく影響を受けていくと思うんです。そうやって少しずつでも関心を持ってもらいたいですよ。

陣在選手は現役選手ですが、今後、どのような形で環境問題に関わっていききたいと考えていますか？

陣在選手 例えばペットボトルの水を買わずに水筒を持ち歩くようにするとか、マイスプーンを持つようにするとか、身の回りのことからやっていければいいなと思っています。

一人ひとりができることを少しずつやって変えていくような方向になればいいですね。

また、私は児童スポーツ教育学部を卒業していて、幼稚園と小学校の教員免許を持っているんです。いつか子ども達にスポーツの楽しさや自分の経験を伝えていきたいと考えていて、その中で環境問題も伝えていきたいいいなと思います。

スポーツという括りというところ、ビーチクリーンや、ランニングしながらゴミを集める活動を耳にすることがあるのですが、山に関する環境活動はあまり聞かないんです。

ゴミを拾う人はいるのですが、ランニングしながらクリーン活動というのはなかなかないので、そういうイベントがあったら楽しそうだなと思います。歩くよりも走る方が遠くに行けるので、少しでも大きな範囲を綺麗にできるのかな（笑）それで、誰が一番多くのゴミを拾えるか、みたいに競ったりして。

湯浅社長 それはおもしろいですね。ホームページやSNSで「私はこういう活動をしています」といった環境問題に関わるメッセージを発信していくのもいいかもしれませんね。

いつか子ども達にスポーツの楽しさを環境問題について伝えたい

